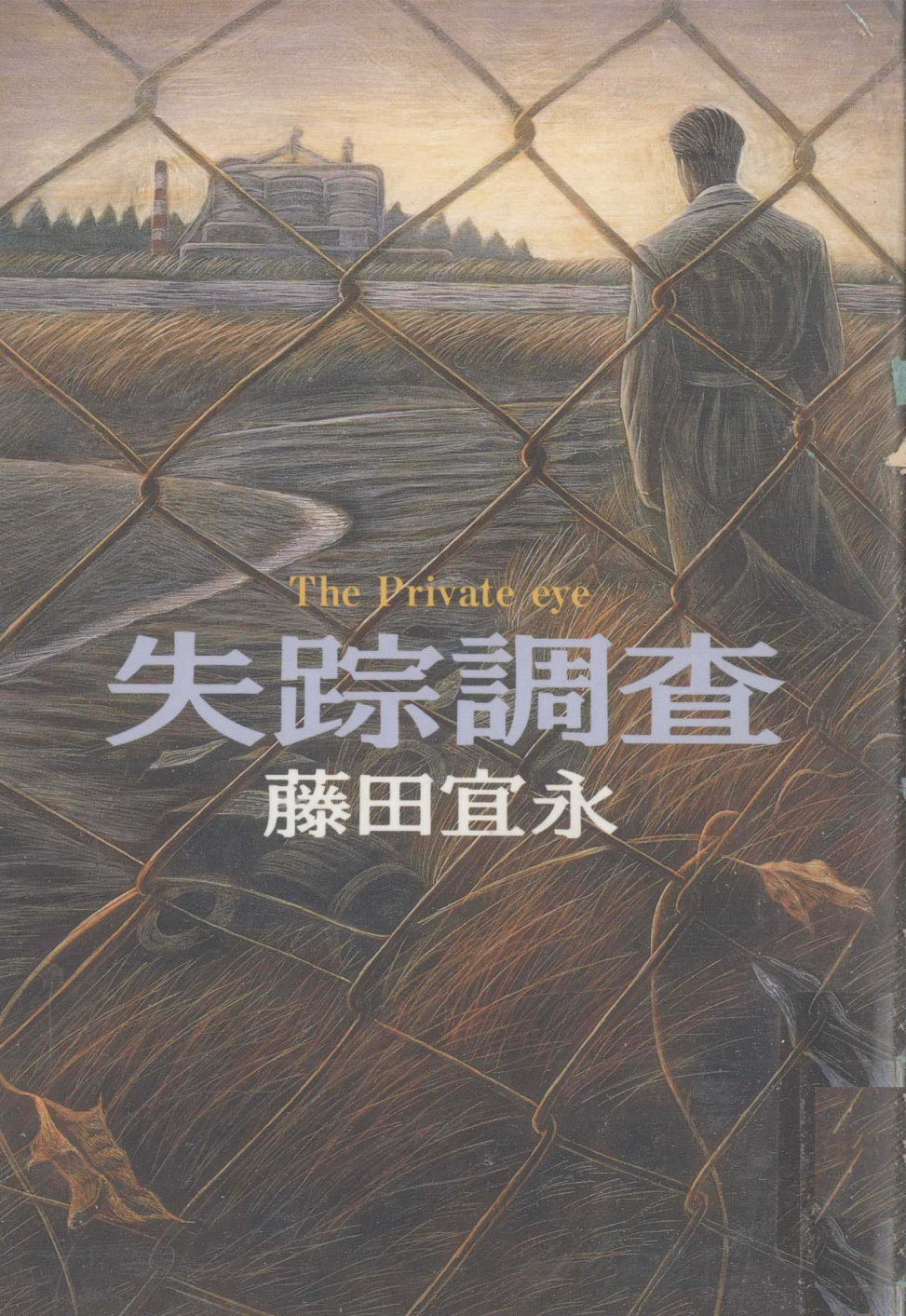




The Private eye

失踪調査

藤田宜永

The Private eye

失踪調査

藤田宜永



光文社

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―一三

(〒112-11)

光文社 文芸編集部

失踪調査

一九九四年 四月二五日

初版 一刷発行

著者 藤田 宜永

発行者 大坪 昌夫

発行所 株式会社 光文社

東京都文京区音羽二―二―一三

電話 東京(〇三)三九四二―三二四一代
振替 東京六一―一五三四七

印刷所 図書印刷

定価 一、五〇〇円

(本体一、四五六円)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。©Yoshinaga Fujita 1994

ISBN4-334-92232-5 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

失踪調査

目次

苦い雨

5

マロージナヤ・ルイバ
凍った魚

81

レニー・ブルースのように

165

あとがき

239

装幀／藤田新策

苦
い
雨

一

早川^{はるかわ}と名乗る初老の夫婦が、竹花^{たけはな}の事務所にやってきたのは、十月の初めのことである。
秋晴れは、近くの文房具店のくれたカレンダーの中だけの出来事で、雨の降り続く陰気な日が
続いていた。

夫の早川^{はるかわ}照夫^{てるお}は、手に持っていたビニール傘のように瘦^やせた貧相な男で、短く刈り上げた髪には
白いものが混じっていた。腫^はれぼつたい一重^{まぶた}瞼^{まぶた}。生気のないかさついた唇。鼻はふてぶてしそ
うに胡座^{あぐら}をかいていたが、色は白く、小鼻の肉は、ペーパー・ナイフでたやすく切れそうなくら
いに薄かった。着ているものは、擦^すり切れたダーク・グレーのスーツで、ネクタイは黒。腕に黒
い腕章でもまけば、そのまま葬式に出てもおかしくない。

一方、妻の静子^{しずこ}のほうは夫とは対照的に押し出しのいい小肥^{こがと}りの女だった。あらゆる肉が緩^{ゆる}ん
ではいるが、目も鼻も口もバランスが取れていて、若い頃は相当の美人であったようだ。目には、
淡いピンクのシャドウがほどこされ、水玉のワンピースに隠れた胸は、まだ「現役」であること
を誇示するかのように迫^せり出していた。イヤリングもネックレスも、そして黒いシヨルダー・バ
ッグの留め金も金だった。

竹花は、テーブルの上にあった灰皿を手を取った。カティサークのロゴの入ったその灰皿は、吸い殻で溢れている。窓際の隅にあるごみ箱に、灰皿を空けた。かすかに灰が立ちのぼった。

雨足はいっそう激しくなり、窓を叩いている。クラクションの苛^{いら}立った音も、湿った空気に吸い込まれて、威勢が悪い。

早川夫婦は、三人掛けのソファの中央に寄り添うように座っている。夫の横には大きなビニール・バッグが置かれてあった。

竹花はふたりの正面に腰を下ろし、煙草に火をつけた。

「それで、ご用のむきは？」

「山浦志郎^{やまうらしろう}というお方を探していただきたいのです」答えたのは妻のほうだった。

妻の口調は穏やかで、切羽つまった様子はなかった。

竹花は何も言わず、早川夫婦が、山浦という人物のことを説明するのを待った。

「山浦先生は、私たち夫婦の恩師でございます。私たちが小学校に通っておりまして頃、先生には、それはもうお世話になったのでございます」

妻の言葉を受けて、夫は大きくうなずいた。

「つまり、山浦さんは小学校の教師だったわけですか」

「さようでございます」

彼女の口調は丁寧で、一言一言、嚙^かみ締めるような物言いである。

「それは戦前の話ですね」

「ええ」

「探偵を雇うよりも、同級生を訪ね歩いたほうが早いと思いますがね。小学校は、そう簡単には夜逃げをしないし、生徒の大半は、地元に残っているんじゃないやありませんか」

「私たちの小学校は戦後に潰されてしまい、跡形もありません。それに、同級生で山浦先生の居所を知っている者はひとりもおりません」

相変わらず、しゃべるのは妻のほうだった。

「どうして、ひとりもないと断定できるんですか」竹花は口許に笑みをうかべた。

「事実だからです」

「順を追って話していただませんか」

早川夫婦は顔を見合わせ、同時にうなずいた。

「私たちは日本人ではございません」夫が言った。「台湾からやってまいりました」

竹花の顔に驚きの表情が現われた。

「なるほど、台湾がまだ日本の植民地だった頃に、あなた方は日本語で教育を受けたわけですね」

「ええ。何もかもが日本式で、今も、あの頃のことは片ときも忘れたことはありません」静子が

竹花を見据えて言う。

「おふたりの日本語は完璧ですが、名前まで日本語名というのは、どういうことなのですか」

「日本語名のほうが、自分らしく感じるからです。私たち夫婦は、今でも日本語で話しています。私たちの生まれ育った村では、大半の人が私たちと同じことをしています。子供たちにも、その良き習慣が受け継がれ、日本語で話すのが苦手な子でも、人の話は理解できます」

「私たちは、ふたりとも昭和三年生まれで、幼い頃から日本文化に接してきました」夫が妻の

言葉を受け継いだ。「中国語を教わったのは、戦後のことです。ですから、日本語のほうが親しみやすいのです」

「山浦先生が、私たちの村においでになったのは昭和十年。私たちが七歳になった年のことです。それから七年間、山浦先生は、村に留^{とど}まっておられました。小学校、いや、あの頃は教育所と呼ばれておりましたが、そこで先生は教鞭^{きょうべん}をおとりになっておられたのでございます」

「先生が、あなた方の村にやってきた時、彼はいくつだったのですか？」

妻は丸い顎^{あご}に手を当て、天井に目をやった。

「よくは覚えていないのですが、おそらく、二十四、五ではなかったかと思います」

「ということは、今は八十ぐらいということになりますね。もうこの世にはいないかもしれない」
「あの先生は、きつと生きておいでです」夫が勢いこんで言った。「なにせ、運の強いお方でしたから。赴任なさってきてすぐに、崖から足を滑らせて三十メートルも転落したのに、足を折っただけで命に別状なかったんですからね。私は……何と言うのでしょうか……いわゆる、やんちゃ坊主で、初めのうちは先生に楯突いてばかりいましたが、そのうちに先生のことが好きになりました。面倒見のいい方で、村の子の髪は先生がバリカンを持ってきて切ってくださいましたし、アメリカの遊びだと言ってゲームを教えてくださいました。コップに水をいっぱい入れて、水をこぼさないように、そこにコインを落とす遊びがあるでしょう。どこから、あんな遊びを習ってきたのか、今でも不思議ですが、ともかく、私たちは、あの遊びがやりたくて、毎日のように先生の家にお邪魔しました」

竹花は、照夫の懐かしげな顔を、うんざりしたような表情で見ながら黙っていた。そして、言

葉が途切れた時、こう訊いた。

「それで、山浦志郎さんを探す手掛かりを何かお持ちですか？」

妻が黒いバッグから手帳を出し、ページの間から、セロハンに包んだ紙を取り出した。

竹花は差し出されたメモを手を取った。

黄ばんだ紙の上部が裂けていて、残っている部分に、芝^{しば}43—2435 山浦志郎 と書かれてあった。なかなかの達筆である。

「破れた部分に住所が書いてあったはずなのですが……」妻がいかにも残念そうな声で言った。

「当時、電話がある家は少ない。何とか調べられるでしょう」

早川夫婦は、ほっとした顔をした。

「しかし、住所が分かっても半世紀も前のものです。すぐに山浦先生が見つかるとは思わないでいただきたい」

「私たちは四日後に那^な覇^はから出る船で台湾に戻ります。それまでにぜひとも先生にお目にかかりたいのです。私たちが日本にいる間に、先生を探し出してくださいませ」

竹花は煙草^{たばこ}を落ち着いた手つきで消した。視線を灰皿に向けたまま、さらに質問を続けた。

「先生を探しにわざわざ日本にやってきたのですか？」

「いいえ。東京見物も兼ねております」静子が答えた。

竹花は鋭い視線を早川夫婦に向けた。「これまでに、先生を探したことはなかったのですか？」

「連絡を取りたいと思ったことは、何度もありました。ですが、実行に移したのは今回が初めてです」

「五十年以上もたつてから、突然、矢も盾もたまらず、やってきたってわけですか」

竹花の口調には、露骨に疑いの色がこめられている。しかし、ふたりの表情に変化は現われなかった。

「いけませんですか？ 私たちが東京に来るのは、今回が初めてなのです」静子がきつぱりとした口調で言った。

「ということは、日本でも東京以外の街には、行かれたことがあるんですね」

「那覇には、ときどき参ります。親戚が雜貨店を営んでおりますものですから」

「台湾ではどんなことをなさっているのですか？」

「輸入の仕事をやっております」夫が答えた。

「東京をまったく知らないおふたりが、どうやって私の事務所を見つけたのですか？ 小さな看板しか出ていないし、タウン・ページにも広告を出していないのに」

「余さんいよをご存じですね。彼から紹介されたのです」

竹花は黙ってうなずいた。台湾人の余は新宿しんじゅくで高級クラブを経営している男である。去年の暮れ、ある機械メーカーの営業課長の身辺調査をやった折りに知り合った。その課長には、使い込みの疑いがかけられていたのだ。彼がある女に入れ揚げていることが竹花の調査で分かった。その女は、余の経営するクラブで働いていたが、ホステスではなかった。レジ係の斉藤美砂子さいとうみさこという女だった。

余は、そんなことで警察と関わり合いになりたくなかったらしく、進んで竹花に協力した。余のクラブには台湾人ホステスも数名働いているのだ。

余と問題の女性、斉藤美砂子と会った竹花は、課長の金遣いについて詳しい情報を得た。

美砂子は、レジ係だけではなく、そのクラブの経理も担当していた。彼女は、その課長が自分に気があるのは知っていた、と正直に答えたが、迷惑だった、と吐き捨てるように言っていた。

早川照夫が、ビニール・バッグのチャックを開け、中から額^{がく}を取り出した。

「この写真は、昭和十三年に撮られたものです。中央に立っている丸眼鏡をかけた人が山浦先生です」

山浦志郎という教師は、いかにも戦前のインテリ風の青年だった。額が広く、頬^ほはこけ、神経質^{しやうしやう}な文学青年に見えた。

その写真には十人ほどの男女が写っていた。山浦以外の人物は皆、台湾人らしいが、中には着物姿の人間も混じっていて、予備知識がなければ、全員、日本人と見間違えただろう。

「この写真に写っている人たちは、全員、日本名を持っていました。幸子^{さちこ}さん、健一^{けんいち}さん、祥子^{しょうこ}さん……」

静子は太く短い指で写真に写っている人間を指し示しながら言った。名前を教える口調からは、懐かしさがあふれ出ている。

「あなたから見れば、台湾を五十年の間、統治していた日本に対して郷愁を覚えているのは変でしょうが、これが偽らざる、私たちの気持ちなのです」照夫が口を細めて言った。

「私は何も思いませんよ」

「五十を過ぎた台湾人の中には、私たちのような気持ちで生きている者が、案外多いんですよ。日本が統治していた頃の台湾を懐かしむ人がね。日本には、今でも修身教育というものはあるの

ですか？」

竹花は短く笑い、首を横に振った。

照夫はいかにも残念そうな顔をして、溜息をついた。

「修身がなくなった台湾では、治安が乱れています。私たちの住んでいる高雄たかおの街でも強盗やひったくりが日常茶飯事です。修身教育があった頃は、ドアを開けっぱなしで寝ても、何の危険もありませんでした」

「犯罪が少ないからといって、住人が幸せだとはかぎらない」

竹花は、そう言って再び煙草に火をつけた。照夫は、竹花の言葉を聞いていない様子で、修身はすばらしい、とつぶやいた。

静子が料金を訊いた。竹花は経費を別にした一日の料金を教え、とりあえず五万円欲しいと言った。そして、彼らの東京での宿泊先を訊いた。早川夫婦は新宿歌舞伎町かぶきちょうの裏にあるビジネスホテルに泊まっていた。

静子が五万円をテーブルの上に置き、ふたりは、うなずき合って立ち上がった。

「四日後の朝には船に乗らなければなりません。それまでに何とか先生の居所を突き止めてくださいませ」

静子が深々と竹花に頭を下げた。

「できるだけことはやってみます」竹花は事務所のドアを開けながら答えた。

静子はショルダー・バッグをたすきにかけ、肩紐の位置をなおした。そのバッグの掛け方が、台湾の治安のきわめて悪いことを暗に物語っているようだった。